夢現

岡田美知代

『一寸逆つてよ車夫さん、此方へ來ちや鶴卷町だわ』

『ヘイ、彼方は大變な登りになりますので、少々の迂曲でも此方が樂で御座えます。』

『アラ左樣……』

願ひても無き幸福よ、今日師の君の御用にて大久保へ使しての歸るさ、老ひたる車夫のいたくも乞ふまゝ、すげ無ういなみも兼ねつ、さして急ぐとにはあらねど乘りて來し車の、我が家は山伏町なれば、若松町よりこそ、戀しの君御在すなる此處鶴卷町よりせんとは、つゆ思ひもかけざりし。夕暮にはなほ程もある可く、暫しを君訪ひて語らなんか、されど此の事につきては、すべて吾に打ち明けてよと、呉々も師の君のたまひつるを、御斷りも無う思ひのまゝに振舞はんは恐れあり。とは云へ、是非語るべき事あれば來ん日曜日こそはの御文にも、兎角は耻しさの先き立ちて、師の君御前に御許し乞はむの勇氣はあらず、再度の御葉書をも其儘打ちすてたれば、さこそは待ちておはすべし、さらば暫し、しばしを……

『一寸車夫さん』

『ヘイ』

『鶴卷町をずつと通るの？』
『ヘイ否、何なら彼方を登りやせうか』
『アラ好いのよ……私ね、一寸御友達を御訪ねしやうかと思つて』
『ヘイ、何方でいらつしやいます？』
『アノ鶴卷町なのよ』
『それで番地は？』
『アラ！』
何とせん、忘れたり、先日の御文にも、昨日の御葉書にも委しう記されたりしならん、さても。
『よく覺えないのよ』
『そいつは一番困りやしたね、何しろ鶴卷町と來たら馬鹿に廣いんでね。
『……でもね、何でも圖書館の直ぐ傍ですつて、解らないか知ら』
『圖書館つて此處の大學のですかい、そんなら貴嬢、其近處の下宿を一々聞いて歩いたら知れますぜ』と元氣よし。
『だつてもね車夫さん、それが不可ないの、下宿じゃ無いんだもの、駄目よ』
『ヘイ其奴あ些少と』
『とても知れないでせうか』
『左様ですね、素人屋で御座えますか』
『え、そうなの』
『些少と知れ難いね、併しカウート、圖書館の近くで以て……何て家です？』
『……』
流石にこれをしも思ひ出でずとは答へ兼ねつ、
『ねえ車夫さん、兎に角圖書館の近所へ曳いてつて頂戴な』
と車上になやましの身を搖られつゝ、切に思ひわぶる苦しさ！鈴木か、井上か、あらず、そは皆曾ての御下宿なり、辻中山、中山とは親しき友の由承りしを、のどもと迄出でかゝりしやうの心地にて、實に遣瀬無のもだえよ、
いつそ此儘に歸らんか、……それも口惜し
『お嬢さん、此處いらで聞いて見ませうか』
『そうね……』
『何て家でしたかね』
『なに、よくてよ、待つて、頂戴、私自分で探すから』
つと横町を曲れば、淋しき〳〵竹藪の、宛ら綠門をゆくが如、はるかの遠に家ありて、ゆるやかなる勾配をなせるブリキ張りの屋根は夕日に輝きて、新に引移りたる家はかくと御文にありし、それにもかなひたりしか、辿りても辿りても、少しも近うはならず、こは何とせし、かゝらむには時移るべし、と思ふ間も無く、はや四邊小暗くなりて、目白なる鐘の音は魂も消ぬべう身に浸み渡りぬ。
あゝ惡しかりき、何故にわれは師の君の御許しなく、密かに此處には來りし、我が歸りの遲きを案じ給ひて、如何ばかりの御不興にやおはすらん、否御不興のみにはあらず、必ず御涙あるべし、やさしき奥樣の御胸も安からで、おもて過ぎ行く駒下駄の音の一つ一つをだも愚かには聞き給はず、或は時にその音の似たりとて、幾度か御耳を澄しつ、あらぬ頼

みに門にや立ち給ふらめ、われは悲しさの堪へ難く、涙とみにあふれ來て、わが胸は破るゝばかり、如何なれば吁……
如何なればと口走りしわれの、こは嬉れし夢なりしよ、さはれ身はしどゝの汗に、苦しかりし、恐ろしかりし、其夢を追ひてなかなかに胸安からず、訪ぬる人の番地、覺めては今更に考ふる迄も無く、苦も無う口をついて早稲田南町五十番地澁谷方と、そは片時忘れ得ぬあくかれの地なるを、一向に鶴卷町とのみ、あらぬ方求めて、徒らに惜しき〳〵時つぶしてし事の口惜しさ、これだに今少しはやく思ひ出でたらんには……
あなうたて、われは夢のみか現に居てなほ師の君欺かんとはしつるか、さても淺間しのわがこゝろ。——完——（九月三日夜）